

あゆみ

第 49 号

2025 毛呂山町合併 70 周年記念号



毛呂山郷土史研究会

井上円了の毛呂村巡講

岡部奈緒美

一、はじめに

井上円了は、明治・大正時代の哲学者であり、東洋大学の創立者である。また、妖怪博士の異名をもつ妖怪学の研究者でもあった。東洋大学の前身は哲学館といい、哲学館大学を経て昭和三年（一九二八）に東洋大学となった。折しもニューヨーク株式市場の株価大暴落に端を発した大恐慌に世界中が陥った二年前のことであった。

明治二十二年（一八八九）十一月十三日、哲学館は台風で倒壊した後に再建された蓬萊町（現・文京区白山）の新校舎に移った。台風による校舎の倒壊は、哲学館の財政を危機に陥らせていた。このとき、井上円了に多大な援助をしたのが勝海舟であった。井上円了と勝海舟のつながりは、井上円了夫妻の仲人を勝海舟の三女夫妻がしたことにある。

明治二十三年（一八九〇）十月に円了は勝海舟を訪ね、哲学館の財政難を回避するために全国巡講を行って寄付を募ろうとする旨を相談した。このとき、勝海舟は円了の考えに賛同し、寄付をしてくれた人へのお礼にと、自身の揮毫を円了に渡したのであった。

円了は、哲学館の財政危機を回避するために、明治二十三年十一月から全国巡講を開始したのであった。

二、大正二年（一九一三）井上円了の巡講

大正元年（一九一二）九月二十七日、埼玉県における大正改元後の第一回巡講を秩父郡樋口村（現・長瀨町）から開始し、十月二十二日までの二十六日間、県北部の五郡、二十七町村、二十八ヶ所を回り、聴衆は一万一千六百人であった。このときには、井上円了が毛呂村へ立ち寄ったという記録はない。

大正二年（一九一三）一月四日、円了は北葛飾郡松伏領村（現・松伏町）の小学校から埼玉県における二回目の巡講を二十四日間の日程で開始した。このときに、円了は毛呂村を訪れたのであった。

五日には不動岡村で講演し、その後は新郷村、手子林村、羽生町、大田村などを回り、十四日には比企郡八和田村の小学校にて講演をした。ここでは、聴衆は五百人だったとある。

その後は槻川村、大河原村など比企郡と秩父郡の郡境である外秩父の山中を経由して、比企郡平村と秩父郡大柵村で講演をした。この二村は、現在はこちらも比企郡ときがわ町である。円了は大柵村について、大野と柵平を合して一村とした山間部の孤村であると記している。ここでの講演は、二〇〇四年に廃校になった大柵小学校が会場であった。廃校になった大柵第一小学校の校舎は、今もその場所に残っている。

このときに円了が書いた大野神社の揮毫が、今も大野神社に掲げられている。全国巡講で寄付のお礼にしていた揮毫は、明治三十二年（一八九九）一月に勝海舟が死去した後は、円了が自分で書いていた。大柵村を訪れたのは大正二年であることから、この頃はもうすでに円了自身が揮毫を書いたので

あった。

一月十九日に大柵村を出て、入間郡越生町を経由し毛呂村に到着する。井上円了が現在の毛呂山町（毛呂・山根・川角）を訪れたのは、この一回のみであった。このとき、円了の移動手段は人力車であった。真冬の人力車での移動は、かなり厳しかったようである。

三、毛呂村での講演

大正二年一月十九日、毛呂村では隣の山根村と合同にて、毛呂村毛呂本郷の東雲高等小学校にて講演をした。聴衆は四百五十人であったことが記録されている。この地においてこれだけの人が集まるということは、かなりの盛況であったのではないだろうか。

この講演開催にあたって、毛呂村長であった福田金太郎氏と山根村長の奥泉伊佐吉氏が尽力したとあり、当時越生にあった郡役所から書記の神山太三郎氏も出張してきたとある。

また、毛呂村は機業が盛んであり、それぞれの家から機を織る機械の音がつねに聞こえると書かれている。おそらく、当時は毛呂本郷の八王子往還は、絹の商いに関わる人々の往来によって賑わっていたのであろう。翌朝は、鶏の声で目覚めたとある。毛呂山町では、昭和末期まで養鶏業が盛んであり、多くの鶏が飼育されていたのであった。さらに、権田直助がこの村出身であることも聞いたようであった。

その夜、円了は東雲高等小学校の裁縫教室を宿所にしたとある。この裁縫教室は、このとき新築されたばかりの真新し

い教室であった。

会場になった東雲高等小学校は、明治四十二年（一九〇九）に毛呂村と山根村の子どもたちが通うために開校した高等小学校である。その後、昭和十六年（一九四一）には学校制度改革で毛呂山国民学校高等科となり、第二次世界大戦後に閉校となった。校舎は昭和四十年代中頃まで毛呂病院准看護学校として使用されていた。現在、埼玉医科大学病院東館の近代的なビルが建っている場所である。

毛呂村で講演をしたとき、井上円了はお礼として大野神社の揮毫のような何かを書いたと思うのだが、現在何も残っていない。また、それを知る人もすでもういないので、今となってはもはや知るすべもないのである。

翌日、飯能を経て名栗村の上名栗第一小学校にて講演し、その後は入間郡内各地を巡講して二十七日に帰京した。埼玉県における四回目の巡講は、二十四日間で埼玉県内の六郡、二十五町村、二十五ヶ所にて講演し、聴衆は一万一千人であったと記されている。

四、毛呂村の出雲伊波比神社の幟

現在も十一月に奉納される例大祭には、町の文化財に指定されている大きな二本の幟が掲揚される。その旗には「明治二三年十月」と「勝海舟安芳」の文字が書かれている。

この幟は、長瀬氏子中の求めに応じて勝海舟が書いたものであると伝わっている。たまたま井上円了が哲学館の財政危機を救おうと全国巡講を始めたときに重なることから、勝海

舟が円了に持たせたものではないだろうかと考えたが、それを決定づける証拠がない。

しかしながら、誰かを介して勝海舟に依頼したのであるという事は、青梅市や行田市に残る勝海舟の幟や揮毫の入手経路からも考えられることである。では、長瀬氏子中の依頼を勝海舟に伝えたのはいったい誰なのであろうか。

五、まとめ

井上円了の著書である『南船北馬』によると、井上円了は四回ほど埼玉県を巡講している。一回目は、明治三十二年に小川町と玉川村へ来訪し、二回目は、明治三十五年五月に秩父郡大宮町（現・秩父市）などを訪れている。三回目の大正元年に続き、翌年の大正二年一月に四回目の埼玉県巡講を行った。このときに毛呂村においても講演し、毛呂村に宿泊している。

記録によると、井上円了が毛呂村を訪れたのはこのときが初めてであり、出雲伊波比神社の幟に書かれている明治二十三年十月に毛呂へ来たという記録は見当たらない。ここにおいて、勝海舟が書いた出雲伊波比神社の幟と東洋大学学祖井上円了との接点を見つけ出すことはできなかった。

毛呂山町の歴史の中で、勝海舟と接点があったと考えられるのは権田直助であるが、直助は明治二十年（一八八七）六月八日にこの世を去っていることから、権田直助が明治二十三年と書かれた幟を勝海舟からもらい受けたということとは考えにくい。だが、勝海舟に出雲伊波比神社の幟を依頼し

たのは権田直助ではないかと考えるのが妥当ということなのであろうか。

しかしながら、結論は不明ということである。だが、勝海舟、権田直助、井上円了の三名には、何らかの接点があったのではないかという可能性は否定できない。このことは、今後の研究に委ねることにしたい。

出雲伊波比神社の幟と井上円了の関係は解明できなかったが、東洋大学の学祖・井上円了が毛呂を訪れ、毛呂本郷にあった東雲高等小学校の裁縫教室に宿泊したという歴史に触れ、学祖と縁のある土地で暮らしていることを大変うれしく思うのであった。

【参考文献】

井上円了『井上円了選集第十二巻』

学校法人東洋大学 一九九七年

井上円了『井上円了選集第十三巻』

学校法人東洋大学 一九九七年

三浦節夫『ショートヒストリー東洋大学』

学校法人東洋大学 二〇二〇年

竹村牧男『井上円了の生涯』

学校法人東洋大学 二〇二〇年

毛呂山町『毛呂山町史』 一九七八年

毛呂山町『新毛呂山町史』 二〇一〇年

都幾川村『都幾川村史』 二〇〇一年

蘆田伊人『新編武蔵風土記稿』 雄山閣 一九九六年

毛呂山郷土史研究会
会報「あゆみ」第四十九号 二〇二五年三月十五日発行より
転載



東雲高等小学校校舎 右側にある裁縫教室に井上円了が宿泊した



大野神社の揮毫